

エディトリアル 地域との付き合い方

地域医療研究所長 山田隆司

自治医科大学卒業生は等しく若くして医療確保に困る地域の医療施設に赴くことが義務付けられている。そこでは限られた医療資源の中、地域の医療ニーズに必死に応えることが求められる。多くは忙しい診療に明け暮れ、まずはさまざまな健康問題と向き合うことになるが、同じ地域で何年も従事するうちに受診する患者だけでなくその背景にある地域の重要性に気付くことになる。しかし、その地域こそが曲者で、なかなか地域の有り様を理解することは困難である。

それぞれの卒業生はそれぞれの地域でそれぞれの理解をし、地域と付き合っている。運良く相性のいい地域に恵まれれば、長く地域に関わることができるが、さまざまな理由で地域を離れざるを得ない状況に追い込まれることも珍しくない。地域は一様ではなく、またそれをまとめる自治体は、関わる人間が増えるほどに複雑であり、そんな地域と付き合うのは難解を極める。いったい賢い「地域との付き合い方」とは何であろう。本特集では長く同じ地域に住み、まさしく上手な「地域との付き合い方」を実践している方々からその知恵を披露していただいた。

三浦源太論文では離島という特殊な環境の中で、行政と一体となった地域医療の実践が報告されており、また一島民としてのコミュニティとの付き合いの重要性も説かれており、まさに地域医療の現場の楽しさ、豊かさが理解できよう。武田以知郎論文では近隣医療施設、医師会、大学との連携、村内の多職種連携の実例が報告されており、地域の診療所に従事する者にとってお手本となる内容となっている。

丹羽治男論文は日本のへき地に共通の課題である、人口減少、超高齢化が進む中での病院運営の維持という極めて困難な事例に真摯に向き合い続けてこられた気迫を感じることができる充実した内容となっている。細江雅彦論文では少し大きな規模である市と、指定管理という手法で組織として地域と付き合い合う例が紹介されており、今後の地域医療の方向性として参考になろう。

最後の十枝めぐみ論文では学校医という切り口での地域へのアプローチが説かれており、教育現場との連携が地域の未来を考える上でいかに重要であるかを改めて思い知らされる新鮮な内容となっている。

地域医療を実践する上で、地域を知ること、地域とうまく付き合うことこそが、その成否に大きく関わっている。こういった地域医療の実践から培った英智を集めて、本物の「地域医学」を構築する必要がある、今求められているのではなかろうか。